

はじめに

豊かな生物多様性と健全な生態系は人類の生存基盤であり、地球の生態系の一員である人類のいとなみに必要不可欠である。近年の人間社会で急速に進んだ都市化や文明化は、人々に便利で豊かな生活をもたらした一方、地域レベルから全地球レベルまでの生態系に大きな変化を生じさせた。人口増加及び人間の影響による自然破壊や環境汚染は、地域の生物多様性および生態系機能を衰退・悪化させ、現在では地球温暖化という人類共通の危機をもたらしている。

こうした状況の下、国連生物多様性年である2010年10月に、生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）が日本の愛知県名古屋市で開催された。会議では、あらゆる主体が参加して生物多様性とその恵みを持続的に利用していくための目標を示した「愛知ターゲット」や、遺伝資源利用の国際ルールを定めた「名古屋議定書」をはじめ、生物多様性の恵みを持続的に利用する取組推進を目指した「SATOYAMA イニシアティブ」など多くの決議が採択された。さらに国連は、これからの10年間を「生物多様性の10年」と定め、2020年までの間に国際的に生物多様性の保全と持続的な利用を進めることとしている。

これまで、生物多様性にかかる現状を把握して具体行動のベースとするため、いくつかの国際プロジェクトが進められてきた。2001年から2005年、国連環境計画を事務局とし、95カ国の科学者が参加してミレニアム生態系評価(MA)が実施された。MAでは地域レベルの生態系評価(SGA)も同時におこなわれ、「人間の活動により地球上の天然資源は枯渇しつつある。環境への負荷は、将来世代が享受するはずの自然からの恵みを喪失させている。その保全・再生のために、政策や慣行を大きく変革する必要がある」ことが報告された。また、生物多様性条約事務局が実施した地球規模生物多様性概況第3版(GBO3)では、「過去にない速さで種の絶滅が進んでおり、このまま生物多様性の減少に歯止めがかからなければ、地球の生態系はティッピング・ポイント（転換点）を超えて急激な劣化を引き起こすリスクが高く、早急な対策が必要である。」と報告された。

日本でも、地域レベル生態系評価(SGA)として「日本の里山・里海評価」が国連大学高等研究所を事務局として実施された。その成果はCOP10において報告され、里山里海の生物多様性の損失と生態系サービスの低下を止めるため、生態系のモザイク構造や人間と環境のつながりに配慮した保全促進と、地域資源の共同管理システムとしての新たなコモンズの構築などの提案が示された。

2008年3月に日本初の生物多様性地域戦略「生物多様性ちば県戦略」を策定した千葉県は、同年9月に「千葉県の里山里海サブグローバル評価（ちばの里山里海SGA）」プロジェクトチームを結成した。暖温帯から冷温帯の移行帯にあたり、多様な水辺・陸域生態系からなる豊かな自然環境、その自然環境を基に成立してきた歴史と文化といった本県の特徴をふまえ、里山里海の現状、特に都市との関係に注目して解析を進め、その課題整理と将来に向けたシナリオづくりを進めた。本書はこれまでの解析を最終報告書としてまとめたものである。

本報告書の作成に際しては、国連大学高等研究所、千葉県立中央博物館はじめ多くの機関及び関係者の方々から貴重な資料・情報をご提供いただいた。皆様に感謝申し上げます。

国連ミレニアム生態系評価「日本の里山・里海評価」千葉サイト「ちばの里山里海SGA」

千葉県環境生活部自然保護課生物多様性戦略推進室長

森 雅邦

千葉県生物多様性センター副技監 併任 千葉県立中央博物館副館長

中村 俊彦